

**Parallel
parallel
with
Hyper
link**

—— Tokyo Neko-jin Blueberry ——

東京猫耳ブルーベリー氏の前口上

僕等が数千年かけて培ってきた物語の真髄、本質は、媒体の変化なんかによって破壊されるようなものではない。

確かに、これまでの慣れ親しんだ紙の物語にあった大切な何か、それがPDFやePubの形では削ぎ落とされているかもしれない。

しかしそれだけのことで、その物語の意味は異なってくるか？ 物語の価値が低下するか？
むしろ電子化は物語の可能性を広がる。

例えばこの『ハイパーリンクでパラレルパラレル』（このタイトルひどいな（笑））ではその名の通り、ハイパーリンク機能を使ってみた。東京猫耳氏は馬鹿なのでこんな使い方しかできなかったが、賢くて有能な人は世界にたくさんいるから、これからもっと有効的で面白いものを作る人が現れると思う（もうすでにいるかも！）。

物語のハイパーリンクは双方を刺激し合うのだ。

この作品はそうではないが、ハイパーリンクを使って物語の始まりと終わりを結びつける事もできちゃうのだ。

回帰する物語。あらゆる意味でその物語ははじめから終わっている。

そんな物語（世界初？永遠小説！）も作ってみたいと東京猫耳氏は申している。

近いうちにお目にかかれるだろうから、ばったりお会いしたときは、どうか愛してやってください。

きっとボルヘスが絶賛してくれると思う。

あ、やべっ、わくわくしてきた。

では、とても短いですが、『ハイパーリンクでパラレルパラレル』です。愛してやってください。

東京猫耳ブルーベリー

それは、いたって簡単なお仕事でした。

秋の街路を往来する老若男女の頭の中に住み着いている、適う事のない願いや呪いのようにまとわりついている苦い記憶を、僕が消しゴムで消してあげるのです。

誰にでもできますが、この消しゴムを誰でも持っている訳ではありません。この特別な消しゴムは、僕だけに与えられた特別な仕事道具なのです。

いなくなった飼い猫をいつまでも探し続けて町を彷徨する白髪のおじいさま。あの猫は車にひかれちゃったんだよ。かなしいね、ケシタゲル。

死ぬ程恋した人が今では誰かの腕の中？ それも、ケシタゲルさ。

友人の、裏切りに似た逃走。ケシタゲルよ。

大切な人が苦しんでいる時に足が竦んで何もできなかった君、今でも抱えてるその苦しみと甘えも、ケシタゲル、ケシタゲルよ。

その時です。何か聞こえるなぁと耳を澄ましてみると、なんと消しゴムのカスから《声》がするではありませんか！

「やめろ 野暮な事するな。人の感情を出す機会を奪うなんて勝手すぎるっ！」

僕は、、、どうするのでしょうか・・・

文学を読みたい方は[A world](#)へ。

そうでない方は[B world](#)へ。

A

その時です。何か聞こえるなあと耳を澄ましてみると、なんと消しゴムのカスから《声》がするではありませんか！

「やめろ。野暮や事するな。人の感情を出す機会を消すなんて勝手過ぎる」

僕は、、、必死に言い返しました。

「何を言うのです！　僕がやってるのは、この世から悲しみを消す事ですよ？　これほど誇れる職業はこの世にそういくつもない、素晴らしい職業なんだ！」

《声》は溜め息をつき、僕にこう言いました。

「君はかなしい人間だね。これ程かなしい人は見た事がないよ」

僕はその言葉を聞いて、自分のこれまでやってきた事はすべて間違いだったように思えてきました。

そしてこれから先にある展開を察し、涙が零れました。急に恥ずかしくなって、《声》に問いました。

「ああ僕が間違っていました。心を改めてます。この消しゴムはもう不要です。これを消す方法をご存知でしょうか？　是非教えてください」

《声》はちいさく笑って、僕にこう言い残して、消えてゆきました。

「わかってるくせに」

B

その時です。何か聞こえるなあと耳を澄ましてみると、なんと消しゴムのカスから《声》がするではありませんか！

「やめろ。野暮や事するな。人の感情を出す機会を奪うなんて勝手すぎるっ！」

僕は、僕は、僕は、……言いました……

「け、け、消しゴムのカスがしゃべったああああ！」
「ええっ！Σ(□;)」

「キモっ！」
「いやそこはメルヘンチックな作品だからアリだよNE☆ で話進めてえや！ つーかお前がこの変なメルヘン雰囲気作ったんやろーが！」
「黙れカス」
「おいこら悪口はやめろや」
「カスにカスと言っただけですー」
「パブーは公共の場やぞ。あらゆる世代の方々が閲覧してるかもやぞ。気分を害するような事を、この、ちょっ、おま……、丸めんなや……鼻糞みたいになるやろうが」
「なぜ関西弁なの？」
「話が飛ぶなあ。Made in 東大阪や」
「東大阪wウケるw君さあ、作品の世界観考えろよw」
「お前が言うな。つーかA worldつまらんよ、がちで。アート気取りよってからに」
「東京猫耳をばかにすんなー」
「ちなみに皆さん、あれやで？ わかってる？ A worldの最後のセリフは「（消えるべきなのは自分だと）わかってるくせに」って意味やで？」
「い、言うなよ〜。つーか読者イジリとか……」
「さむう。ほんまキモいセリフやわあ。サブイボ」
「あれ？声がかもってきたよ、消しゴムのカスさん」
「そりゃお前が俺をコネコネこねて団子状にしたからじゃね？ 知らんけどっ?!」
「何故キレた。しかしこのB worldは誰も得しないなあ」
「いいんじゃないね？ 電子書籍の特性を活かしたものを作ってみようって企画だし。作品も中身の無い話だし」
「Cもあるのかなあ」
「シラネ。あるんじゃない？」
「ほんと誰も得しない」
「つーかさっきから言ってる誰もって誰よ」
「そりゃあ、僕と君はもちろんだけど、著者とパブーも危害を被る形となるよね。あと読者も」
「お前って損得しか考えてないからなあ」
「そんなことないけど……」
「あっ！ 鉛筆さんおはよう ございます！ 今日キマってますねえツンツンですよ、さきっちょ」
「腰低っ！ まあ鉛筆あつての消しゴムの仕事だもんね」
「そうや。しかも4Bさんやで今のお方は」
「それは濃いな」
「やろ？ お得意様やでほんま。でも最近の子はワープ口使いよるからなあ。なんつーの？ あれ、文字消すボタン」

「バックスペース？」

「そうそう。お株取られた感パネェわ」

「もうほんと黙れ。君の最後のセリフをバックスペースで消してから物語閉じるわ。読んでくれてありがとう。A worldもよろしくね。C worldもあったらよろしくね。でわでわ」

「ちょっ